

# 第四編

## 《教育座談会》

### 安房の子どもたちの学力向上を考える

今日の変化の激しい社会の中で、子どもたち一人一人が困難な状況乗り越え、主体的・創造的に自らの人生を切り拓きながら力強く生きていくためには、生涯にわたり学び続ける力を育成する必要がある。このような社会において子どもたちに求められる学力とは「生きる力の知の側面」と言われる「確かな学力」である。

学校教育法第30条第2項は、「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない」としており、学力の重要な要素を「基礎的・基本的な知識・技能」「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等」及び「学習意欲」としている。

さて、この「確かな学力」という言葉は2002年1月17日、当時の遠山 敦子文部科学大臣により『確かな学力の向上のための2002アピール「学びのすすめ」』と題した緊急アピールとして国民に示された。これは、昨年度の第59次安房地方教育研究集会 記念講演の講師、市川伸一教授（東京大学大学院教育学研究科教授）による『学力低下論争』（筑摩書房2002）に代表されるように、2001年から2002年にかけて社会的な論議の的となった「学力低下」問題が出されたことが背景にある。

これを機に始まる「ゆとり教育」から「学力向上」への転換に向けての議論は、PISA2003（OECD生徒の学習到達度調査）とTIMSS2003（国際数学・理科教育動向調査）の国際調査により、日本の順位が相対的に下がってきたことが発表されたことでさらに高まることとなる。また2007年、43年ぶりに復活した全国学力学習状況調査における都道府県別の順位が公表され、学力上位となった自治体への視察が頻繁に行われていることからわかるとおり、行政・学校現場にとって学力向上は喫緊の課題となっている。

現在、学校現場ではこれらの調査結果をもとにして、それぞれの特色を生かしながら「確かな学力」の向上に向けた取組を行っている。児童生徒の学力の状況を的確に把握し、その課題解決に向けて教員の指導力や指導體制の工夫・改善を行い、子ども一人一人の状況に応じた指導やわかりやすい授業づくりを進め、子どもの学習意欲を高めるとともに、学習のつまずきを早期に把握し、的確に対応することが大きな課題となっている。

そこで、本年度の教育座談会は、テーマを『安房の子どもたちの学力向上を考える』と設定し、本日それぞれの立場でご活躍されている5名の方々をパネリストとしてお迎えした。座談会では、「安房地域の子どもたちの学力の現状と課題」「安房地域の子どもたちの学力向上に向けて」「学校・保護者・地域社会等に期待すること」等についてお話をいただく。

この座談会が、安房の子どもたちの学力向上に向け、学校・家庭・地域社会がどのように連携して指導・支援していくかについて考える場となることはもとより、その輪が広がり安房教育のさらなる充実と発展につながればと考えている。

パネリスト	石井 恵子 様	（鴨川市立小湊小学校校長）
	相良 和久 様	（館山市立館山小学校教頭）
	早川 正義 様	（千葉県立長狭高等学校教諭）
	永田 司郎 様	（株式会社 Kamiko 神子学院南房総エリア統轄マネージャー）
	杉村かおり 様	（株式会社 Kamiko 神子学院講師・保護者）
司 会	吉田 貞子	調査研究部主事
	森田 典子	教育研修部主事

## 教育座談会記録

**石井所長**：皆さんこんにちは。本日はパネリストの皆様、大変お忙しい中をご出席いただきましてありがとうございます。教育座談会の開催に当たり、主催者といたしまして一言ご挨拶を申し上げます。

現在、教育界には様々な問題が山積しております。この中であって私どもの安房教育研究所は、昭和39年に地域の教育研究所として設立され、目の前の子どもの姿を見つめながら、安房地域の教育課題に対して調査・研究を深め、その成果を学校に還元していく活動に取り組んでおります。

当研究所は、調査研究部、教育研修部、情報部の3つに分かれ、毎年テーマを決めて活動を行っております。今年度、調査研究部では「携帯電話の適切な利用に向けて ―安房と全国の調査結果を比較して―」のテーマで研究を進めています。また、教育研修部は、「思考力を高める学習指導のあり方」のテーマで授業実践を進めています。そして、情報部では「PCによるアンケート調査ソフトの活用のあり方を探る」をテーマとして研修に取り組むと共に、HPの作成を進めています。

さて、本日は「安房の子どもたちの学力向上を考える」と題して座談会を開催いたします。私どもの研究活動をさらに推進していくためにも、皆様と共に考え、論議を深めてまいりたいと思います。どうか忌憚のない御意見をいただければ大変ありがたいと思います。

パネリストの皆様の話聞くだけでなく、是非、フロアーの所員や参加者の皆様にも座談の輪に入ってください、皆様と共に教育を考えていく会にしていきたいと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

**遠藤**：パそれでは、ネリストの皆様をご紹介させていただきます。

鴨川市立小湊小学校 校長	石井 恵子 様
館山市立館山小学校 教頭	相良 和久 様
千葉県立長狭高等学校 教諭	早川 正義 様
神子学院 統轄マネージャー	永田 司郎 様
神子学院 講師・保護者	杉村かおり 様

司会は、調査研究部主事 吉田貞子と教育研修部主事 森田典子です。

**遠藤**：本日の座談会は、「安房の子どもたちの学力向上を考える」と題してお話をうかがいます。座談会を始めるに当たり、学力向上について問題

提起をさせていただきます。

今日の変化の激しい社会の中で子どもたち一人ひとりが困難な状況を乗り越え、主体的・創造的に自らの人生を切りひらきながら力強く生きていくためには、生涯にわたり学び続ける力を育成する必要があります。新学習指導要領では、基本的な知識および技能を習得させると共に、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力、その他の能力を育み、主体的に学習に取り組む態度を養っていくこととされております。

さて、1998・1999年に告示された小・中学校、高等学校の学習指導要領においては「生きる力」をはぐくむことが基本理念とされました。この「生きる力」の知の側面である「確かな学力」を定着させるために、すべての児童生徒に指導する内容が3割削減されました。これにより教育現場に混乱が生じ、子どもたちの学力低下を心配する声が高まってきたことから、当時の遠山敦子文部科学大臣が「確かな学力向上のための2002アピール」（「学びのすすめ」）を出し、学力低下問題への具体的な対応策をとることとなります。時を同じくして、昨年度の安房地方教育研究集会で御講演をいただいた東京大学の市川伸一教授は、その著書『学力低下論争』により教育界に大きな問題を提起しました。この後、いわゆる「ゆとり教育」から学力向上への転換に向けての議論が始まることとなります。

その後に行われた「IEA 国際数学・理科教育動向調査 (TIMSS)」や「OECD 生徒の学習到達度調査」等の学力調査から、世界における日本の学力レベルや順位の低下が問題となる一方、学力が1位の秋田県に各都道府県からの視察が行われているように、学力向上が一番大きな教育課題になっているのではないかと思います。

現在、各学校においてはこれらの学力状況調査の結果をもとにして、それぞれの実態に応じて各学校の特色を生かしながら学力向上に向けた取組を進めています。そこで重要となるのは、児童生徒の学力の状況を的確に把握し、課題解決に向けて教員の指導力や指導体制の工夫・改善を行い、子ども一人ひとりの実態に応じた指導や分かりやすい授業づくりを進めていくことです。そして、子どもの学習意欲を高めると共に、学習のつまづきを早期に把握し、きめ細かく対応していく必要があります。

本日は、安房の子どもたちの学力向上について5名の先生方からお話をいただき、座談会参加者の皆様と共に学力向上について考えていきたいと思ひます。

座談会では、柱1として「安房地域の子どもたちの学力の現状と課題」、続いて柱2として「安房地域の子どもたちの学力向上に向けて」、最後に柱3として「学校・保護者・地域社会等に期待すること」についてお話をいただきます。その後、フロアの皆様にも協議に参加していただき、議論を深めていただきたいと思います。

この座談会が、安房の子どもたちの学力向上に向け、どのように学校・家庭・地域社会が連携して指導・支援していくかについて考える場となり、安房教育のさらなる充実と発展につながればと考えています。

それでは、座談会の進行を司会のお二人の先生方に引き継ぎたいと思ひます。どうぞよろしくお願ひいたします。

**吉田**：ただ今遠藤主任主事より問題提起がありました。これから先は柱1の「安房地域の子どもたちの学力の現状と課題」、目の前の子どもたちの学習や生活の様子から気づくこと等につきましてパネリストの5人の先生方からお話をいただきたいと思ひます。まず石井先生よろしくお願ひします。



**石井**：安房の子どもたちの学力を向上させるため、この教育座談会が実りあるように精一杯務めさせていただきます。どうぞよろしくお願ひします。では本題に入らせていただきます。

私は小学校に勤務して31年目になります。その間に、3年間教育センターで教育相談の担当として不登校のお子さん、それから御家族、不登校の子どもを抱える先生方と相談をさせていただきました。そこから見えてくる安房の子どもたちの学力の現状と課題ということで3点お話をさせていただきます。

1点目は、基本的な生活習慣の乱れと学力の関係です。今、基調提案にもございましたけれども、やはり非常に関係が深いと思ひています。「早寝早起き朝ごはん」が大事といわれています。実際、午後10時から午前2時ぐらいに最も成長ホルモンが分泌されるということ、長狭学園の児童か

ら教えてもらったのですけれども、この生活習慣が乱れていたということでは、学習への意欲の低下はもちろんだと思ひますけれども、授業に集中できない、粘り強く頑張ったりすることができるはずもないかなと思ひます。学力の格差と言ひますけれども、この生活状況の格差は想像以上ではないでしょうか。核家族化が進んで子育てに適切なアドバイスや支援がないというそういった状況の中で、仕事と子育てのバランスが取れなくて苦しんでいる若いお父さんお母さんが増えていると思ひます。また、自分の勤務したこれまでの学校の様子を見ると、母子家庭が増えてきているなあということも感じます。やはり親がゆとりを持って子育てをするという当たり前のことが当たり前にできなくなっている現状を生んでいるのかなと思ひます。そして基本的な生活習慣の乱れにつながっていくのではないかなと感じています。

2点目ですけれども、自分の考えをきちんと主張することができない子が多くなっているのではないかなと感じます。安房地域の学校はやはり小規模化している様相がありますね。昨年度は鴨川市で3つの小学校が統合しました。新生長狭小学校として誕生したわけですけれども、続いて平成23年度には南房総市で2つの小学校が統合されます。実は本校も児童数10人以下の学年が3学年あります。子どもたちは子どもらしい元気さや明るさがありますし、教えてもらおうということは素直に受け止められます。でも、自分から進んで自分の考えを主張するというはやはり苦手ななというように思ひます。子ども同士の関係も少人数であるがゆえに、固定化されがちで自分の考えと違っていても相手に合わせてしまう。また難しい問題に最後まで取り組むという、そういう意欲やエネルギーに欠けているような気がします。すぐに分らないと諦めてしまうといった姿も見られます。少人数ですから、繰り返し練習して計算方法や漢字の読み書きを知識として身に付けるということには、大変効果が上がっていると思ひます。でも、自分の考えに自信が持てるまで思考し表現する力、こういう力を付ける必要が本当にあるなと感じています。こういう本校の実態というのは安房地域全体の傾向じゃないかなということをお心配しています。

最後3点目ですけれども、体験による習得と活用する力の関係ということについてです。このことについては、学力というものをどうとらえるか

ということにも深く関係すると思います。皆さん「学校教育の指導の指針」をお持ちだと思いますが、そこには基礎的・基本的な知識及び技能を習得させると共に、自ら学び思考し表現する力を高め、人生を拓く確かな学力を育むと記されているのですよね。また、言語活動と体験活動の充実ということも重点として記されています。現在安房のどの地域を見ても、自分が育った昭和30年代から40年代の時のように徒党を組んで外で遊ぶ子どもの姿というものはほとんど見られなくなっていると思います。PTAの活動で長期休業中の地域パトロールというものがあるんですが、これを実施しても子どもの姿はほとんど見られなかったという報告ばかりが上がってくるのが現状です。本来生活全般にわたって色々な体験をとおして身に付く力、そういうものと、学校で付ける知識・技能の習得とそのバランス、そういったものの上に確かな学力が成り立ってきたのではないかと思います。そのバランスが崩れているといった現在の状況ではないかと思っています。

最初にお話しした家庭状況と関係があるのですが、物の豊かさ、そういうもので子どもへの愛情を示す親御さんが増えているのではないのでしょうか。そしてまた、少子化も大きな原因ではないかとみています。本物の体験ではなくて、バーチャルの世界での体験で何でもしてしまう。また、親御さんの方から見ると塾に行かせて成績を上げる、または保つ、そういうことで子育ての大半の責任を果たした気になってしまう。こういうことでは学校で学んだことが生活と結びついていかない状況が生まれてしまうのではないかと思います。私は小学校の発達段階から見て教室の中で学んで得る知識というものがありますよね、それは体験をとおして実感することで、確かな学力として定着するのではないかというように考えています。ですから社会生活での豊かな体験ということがあまり望めないという現状がある以上、「学校教育指導の指針」でも強調されているように、体験活動の充実ということが学校に求められているのではないかと考えています。

**吉田：**石井先生から基本的な生活習慣の乱れ、生活状況の格差に踏み込んでのお話をいただきました。自分の考えを主張できないことに対しては先生の学校の状況から、また体験不足、活用する学力との関係がどうしても同じだというお話をいただきました。続いて相良先生よろしくお願ひします。



**相良：**私は今年から館山小学校勤務ですが、前年までの3年間は教育委員会に、その前が中学校にいましたので学校現場の大半は中学校ということになります。

現在、小学校は7か月しかたっていないので多くを知っているわけではありませんけれども、小中の関係も含めながら学力について話ができればなと思います。

まず、柱の1ということで、学力の向上というようにあるのですけれども、裏を返すと学力の向上を考えるとということは、学力が低下しているだとか、学力が向上していないなところから、論議がされているんじゃないかと思っています。ただ、僕が思うのは学力といっても、「学力論争」となると話があちこち行っちゃうのでなかなか難しいんだけど、いわゆる「見える学力」と「見えない学力」という2つあると思うんです。今回のテーマはどちらかということ、先ほど遠藤先生が話したように、包括的に考えれば両方が学力としてはあるんだけれども、今回は「見える学力」の方、つまり点数で示される部分の方がやや多いし、こちらの話をしていくことになるのかなというように思います。

そうは言うものの、学力が下がっているというよりも僕は根本的に学習意欲が下がっているというように思っております。自分には子どもが3人いて、上が高3、真ん中が中3、その下が5年生で、ちょうど上の2人が受験期なんです。子どもを見ていて感じるのは、本来子どもってそんなに勉強が好きじゃないし、嫌々やっている部分もあると思います。私もそうだったんだけど、でも何か質的に違うなと思います。というのは、僕の場合では、それでも学習意欲っていうのが後付けでも、付いていって勉強していったような記憶があるんですが、今の2人を見てるとやっぱりやらされているという感覚をすごく感じます。その裏には、結局受験に対する勉強だけをしているということですよね。でも、もっと昔は知的な好奇心とかがある中で勉強してたりとか、あるいは社会科を勉強していくと、「こういうことがあるんだ」「ああいうことがあるんだ」ということを勉強しながら少しずつ知っていて、嫌だ嫌だと言いつつもやっぱり勉強して楽しいなと思う部分もあってやってきていたんじゃないかと。そういう

ことを考えると、どうも本当にやらされてやっているなという感じがします。

このように子どもたちの学習意欲が減退している原因として、一つは先ほど石井先生がおっしゃったことのように、何でもあるというところに原因があると思います。家の子どもを見ていると、携帯があってゲームがあってテレビがあって漫画があってというように、興味をひくものがいっぱいあって、勉強より面白いものがいっぱいあり、そういうもので時間をつぶせる。勉強というのは難しいし、苦しいし、なかなか勉強に目が向かないっていうのがあるのかなと思います。本来は暇な時間ができたら自分で何かを探したり、自分で遊びを探したりというのがあるはずなのに、与えられたもので生活しているという子どもが多いと思います。ですから1日ほどにかくゲームやって終わってしまうとか、土日に子どもが遊びに行っても友達と一緒にゲームやって終わってしまうとかで、何か基本的に脳で生み出すとか、新しいものを少しでも何かやろうということが繰り返しの中でやれていないと思います。そして、学校に行けば子どもが勉強しないからと言って先生方は丁寧に教え始めますよね。そうすると丁寧に教えてくれるから、ただ座って聞いてればいいみたいな状況になる。そういう意欲がないというところを感じる部分があります。

**吉田**：学力低下というよりもその前のまず学習意欲が大切である。その裏には今の子どもたちの情報過多や物のあふれているという状況にあるところから、知的好奇心が希薄になってしまっているのでは、というお話でした。



**早川**：本年度から長狭高校に赴任いたしました。昨年までは館山総合高校、その前は安房水産高校で進路指導主事をやっておりました。その観点を含めまして、高校側の立場から、小中の先生方に現状を知っていただければと思います。

さて、私の生まれは鋸南町です。生い立ちから語るのは安房の子どもたちの気質というか性質を考えたときに、自分と比較して安房の子は恵まれていると感じたからです。私は鋸南町で生まれましたが、生まれた時には父親は地方回り、工場回りで勤務しておりましたので、藤沢にいました。藤沢を出発にある会社の全国の工場回り

をしていったんです。小学校は2つ、中学校は3つ行きました。小学校は静岡の磐田というところから始まり、鳥取で小学校を卒業しました。そこで中学校に入って、途中北海道の山の中の学校、牛のいっぱいいる所に行きまして、中3の2学期に鋸南二中に戻ってきました。実際に生まれた場所ですけれども、鋸南町では育てておりません。安房の人間なのですが、安房のことをほとんど知らないまま、子育てをしております。

私が回ってきた地域は、日本海側がほとんどだったんですが、非常に温暖な気候に恵まれ、のんびりしたい所です。友だちが北の方からやってきて、本当に住みたいというような場所です。その風土が逆に言うと子どもたちの気質をのんびりさせているのか、おだやかなとてもいい子たちが多いです。東海道に位置する東西の交通の要所である磐田と比べると安房の地域は、どちらかというところだとどん詰まりといった所にいるわけなんです。そういう場所からしても非常に気質がのんびりしていて、おだやかでいい子が多いと思います。これは安房の利点だと思いますけれども、逆に言うと歯を食いしばって周りの情報を得て頑張ろうという、目標に耐えて頑張ろうというところが若干欠けるのかなと。自分の子ども見ているともそう思います。それからもう一つは、非常に狭く小さい仲間内での結果とか順位にこだわる。高校で部活の指導をしていると、中学校時代にあいつとやっであいつに負けたから勝てないというように、やる前から結果を自分で勝手に決めてしまっているところがある。「そんな狭い地域じゃないだろう、高校は千葉県全体なんだから、頑張っても勝てない」と。それでいて、ブロック予選は勝てなくても県いったら勝ててしまったり・・・、そういうこともあります。ですから非常に狭い。その点が強く感じられます。しかし、これが安房の子どもたちのいい点でもあり、逆に悪い点でもあるのかなと思います。ここが開けていけば、伸びるのではないかなと感じます。

**吉田**：安房の子たちの気質ということから話していただきました。安房地域の特性ということで外に出ようとする子どもたちがあまりいないということ、仲間同士の順位にこだわる狭い地域の影響を感じるという点が安房の子どもたちの長所でもあるけれども、この点を取り除いてあげると伸びるのではないかということでした。



**永田**：私，神子学院という学習塾で講師をしております永田と申します。よろしくお願いたします。私は名古屋出身で，高校まではずっと名古屋におりました。

1年浪人したんですが，そのあとで大学で東京の方に来まして，御縁がありましてこちらの千葉の方に来しました。

今，統轄マネージャーという重々しい肩書がありますけれども，実際には色々な校舎に顔を出して授業をやっているというような職務でして，鴨川校・千倉校・鋸南校・館山校・木更津校・君津校で週7日で51コマ授業を持っています。職員からは「すごいなあ」とよくいわれるんですけども，はっきり言いまして子どもが好きですので「先生に教えてもらいたい」というお申し込みがあれば，極力お引き受けしております。今，早い子ですと朝6時50分から8時20分という子がいるんです。安房高の生徒なんですけど，「受験前にどうしても先生に化学をやってもらいたい」で私時間を見るんですけど，時間が空いていない。「朝の時間しか空いていないけどいいかな」，「いいです」といった感じで，結果として51コマやらせていただいております。科目は高校生になるとさすがに全部教えるといったことは難しいので，数学と物理と化学だけにさせてもらっているのですが，中学生までであれば，一応全教科教えさせていただいております。

私が実際に色々な生徒たちと接してしまっていることは，安房の生徒たちは他の地域と特段変わっているということもなく，本当に素直で素質もとっても良い子どもが多いというのが正直な感想です。ただ一つははっきり言えることがあります。家庭学習の時間が本当に少ないなということを感じています。例えば，木更津高校に通っている生徒たちに「君，中学校3年生の受験生の時どのくらい勉強した？」と聞きますと，「4時間しました」「5時間平日でもやっていました」ということを平気で言ってくれます。ところが現状安房高に受かった生徒さんに同じ質問をすると「あ，ほとんどやっていません」こういう子が結構多いんですね。「まあ，なんとかかなと思った」という話ですね。この地域は，かなり家庭学習の時間が少ないなということを感じております。原因はいろいろあると思います。現実的に受験倍率が非

常に低いだとか，「まあ何とかかなるだろう」という甘い気持ちが子どもたちにも蔓延してしまっているということもあるとは思いますが，現場で感じることは，家庭での学習時間が他の地域と比較して本当に少ないということです。

**吉田**：安房の子どもたちは他地域の子どもたちとあまり変わらない素直でいい子が多いけれど，学習時間がものすごく少ないといったことがあげられました。



**杉村**：私も神子学院で時間講師をしています。一昨までは普通の塾で，夫の親の看護からはじまって，自分の祖父母の看護，実家の店を手伝い，主婦をしながら，3人の子どもを育て，

学校のPTA活動や地域の活動に参加したりとかしていました。御縁があって神子学院で講師の仕事をしてもらっていますが，私は主に個別指導をしております。一斉授業も1時間持っていますけれども，その他に家庭教師をさせてもらっていません。週のほとんど毎日，夜はどこかで授業をしている感じです。自分の子どももいるんですが，自分の子どもはなかなか言うことを聞かないので，神子学院の他の先生に見ていただいているんです。どうしても子どもたちを母親の目で見ってしまうんですね。

神子学院では，生徒さんのお母さんたちから色々な相談を受けたり，子どもの学習のお話とかする機会がよくあります。よく二極化といわれておりますけれども，私の場合，神子学院で個別指導を受けるという比較的家計に余裕があり，家計をやりくりしてその中で子どもを塾に通わせている割と恵まれた子どもたちを見ています。先ほど意欲というお話が出ていましたが，子どもの成績を上げるために親御さんが一生懸命働いて，家計をやりくりしてお金を出して塾に入れているので，授業で一生懸命教えるわけです。ところが，子どもたちは全く意欲がなく，家庭学習の時間も全くないので，一週間に1時間教えても次の週は全く忘れてる状態です。子どもは，学校でも授業を受けているんですけど，学校の授業の内容もあまりよく覚えていなかったり，進歩が本当にないんですね。頑張って宿題を出してやってきなさいと勉強させるんですが，宿題はやってきているのに覚えていない。テストをやるよっていても覚え

てこないということがとても不思議なんです。どんな子どもたちかといいますと、家庭的にも恵まれていて、朝食を食べないとか、家庭の生活が乱れているとかは全くなく、挨拶がきちんとできて生活習慣もきちんとできて、共働きのお母さんなので、子どもたちはお手伝いもするんですよね。お母さんの帰りが遅ければ、洗濯物を取り込んだりとか、そういうこともしているんですね。それなのにどうして学習に対して意欲がないのかというと、どこかで子どもたちは親に依存していることが原因ではないかと思います。私も親ですが、どうしても自分が気づかないところで子どもの尻ぬぐいをしているんだろうなと思います。お母さんたちも必死ですからね。「子どもたちの成績をどうにか上げてください」と、すごく必死なんです。それなのに子どもたちがあまりにも親の気持ちにできていない。子どもたちには子どもたちの人生があるのでしょけれど、そこが分かっていないという子が多いなあとと思います。そこで一つ感じたのは、子どもたちの価値観というか、良い子たちは、社会的に多くの人と接し、きちんと約束は守れるし、挨拶もできる、基本的な生活習慣もできるんですけど、そこで褒められて自分の価値を見出しちゃうんですね。でも勉強ができなくて怒るのは親だけ、世間は勉強ができなければこの子はこういう子というように見ちゃうから、別に危機感を持っていないんじゃないかというような気がしました。

また、今まで子どもを育ててきて保護者同士の会話の中で強く感じたことがあります。私は小学校の先生を信じて学校ではのびのびと、そして学校で出されたことをきちんとやっていればこれでいいんだと思っていました。そして、自分のことは自分でできるはずだと子どもを信じて小学校時代に子どもを塾に行かせなかったんです。でも、小学校の時から子どもを塾に入れてきちんと塾で勉強していた子どもたちが中学へ行って勉強ができるんですね。その点はすごく私は悔しくて、自分で塾の仕事をするようになってから「ああ、こういうことだったんだな」って少し分かってきたところです。今、「やっぱり塾に頼らざるをえないのかな」という思いがしているところです。

**吉田**：保護者の立場、母親の立場から見て、安房の子どもたちは依存心が強いということでした。最後には塾を頼らざるをえないかなという御意見でした。

さて、今までのところは安房地域の子どもたちの学力の現状と課題というところでした。続きまして柱の2ということで安房地域の子どもたちの学力向上に向けてお話をいただきます。

**石井**：今、杉村先生のお話をから、何か突き付けられた思いがしましたけれども、そのお話をうかがった次に私が、学校では学力向上に向けて何をするかということこれからお話しするのかなと思うと、「そんなことありません」と言いたいところですが、点数として表れてしまうものなんですかね。成績は表れますけど、学力ってことはどうなのかなっていう自問自答があります。先程も申し上げたとおり、小学校が長かったので、中学校との関連を大切にしなければいけないと思うのですが、小学校時代にどんな力を付けてあげたらいいのかなということ、自分はずっと考えてやってきたかなと思います。自分自身の経験からお話をさせていただきます。

私は、学力向上のための具体的な取組ということで、5つ考えてみました。これは非常に具体的な話で、全て今本校で取り組んでいることです。所員の中に本校の職員がおりますので、「校長先生は、嘘を言っている」と思われては怒られますので、正直に申し上げたいと思います。

1つ目は、まず日常の授業が大事だと思うんです。ここで基本的な学習習慣づくり、これに取り組んでいます。しかもこれは安房東中学校区分離型小中一貫校といまして、校舎はバラバラなんですけれども、小中一貫校として三校共通での取組の一部なんです。具体的には、朝読書を行うこと、授業の準備をしてチャイムで授業を始めること、それから授業中の聞き方や話し方の約束。あと、ノートを確実にとるということ、宿題は必ずやるということ、宿題以外の物も含めて、家庭学習の習慣を付けるということなんです。

2つ目は、問題解決的な学習の過程を大切に授業をやるということです。南房総教育事務所から勧められている「セルフチェックシート」のことは御存知の方が多いと思うのですが、そのチェックシートを活用した授業を週に1回以上は行うという共通理解のもとに全学年で取り組んでいます。今年度は問題解決的な学習の効果ということが期待される教科として、算数と社会科を取り上げたんですけれども、この2つの教科で、思考し表現する力の育成、それを目指した校内研修を進めています。

3つ目です。できるだけ体験をとおして理解が深まる、そういう授業の取組をしています。学習過程にゲストティーチャーから学ぶ場や実物を見て感じて学べる見学、そういうものを取り上げています。特に初歩的な学習の時間、これが体験をとおして理解を深めるのにとっても有効な学習ができるものだと考えます。そのため、できるだけいろいろな体験活動をできるように工夫しております。本当に具体的な一例なんですけど、今年度6年生が小湊の町の発展として自然の保護をテーマにした環境学習を実践したんです。地域に千葉大のバイオシステム研究センターというところがあるんですが、そこと連携しまして、全国でも珍しいクサフグの産卵の様子を実際に子どもたちが見られるように配慮していただきました。本当に子どもたちは自然の素晴らしさに感動していました。また、鯛の浦の遊覧船を御存知でしょうか。この遊覧船に観光客の減少の問題があるわけですね。また、鯛の数が非常に減ってしまっている状況をうかがったり、地域の歴史や文化というものが今日まで大事に伝承されていたのに、今それが危機なんだということを子どもたちは直接そこで働いている方の声を聞いて知ったわけですね。そして、疑問に思ったことの解決に向けて自分たちで今度は現場に出かけて観光客にインタビューをしたり、働いている方や家族と語ったりとか、そういう人たちがどんな考え方をしているのかを調べたんです。それで様々な立場に立って、考えを主張し合うという学習をしました。子どもたちは6年生なりに小湊の発展、文化、自然の保護、これらのバランスを保つために自分はどうしていったらよいか決意するという学習をしました。このような体験をとおした学習の中で、座学で習得した基礎・基本が生かされて、また関連して積み重なり、理解が深まって確かな学力が身に付いていくのではないかなと思います。学校ですから一人で勉強する場所ではないので、複数で学ぶ良さというものを最大に発揮してくれるかなというように思います。

4点目は、家庭との連携についてです。1点目のところの学習習慣でもお話したんですが、宿題とか家庭学習の取組を確実にしていくことが必要だと思います。先程お話があったように安房の子どもたちは非常に勉強してないということなんですけど、小学校の段階で本校では各学年発達段階に応じて身に付けさせたい内容を示して、学

年プラス10分ということによって家庭学習を定着させていこうという努力をし、取り組んでいるんです。もう少しで完成するんですけど保護者・家庭の協力を得るために「家庭学習の手引」というものが必要ではないかということで、今作成中です。家庭学習はもちろん大切なんですけれども、それだけではなくて、それぞれの家庭でできる精神の豊かさを大切にしたい体験をしていただくことが大事だと思っています。相良先生がおっしゃっておりますけれども、豊かな体験というのは、どこかに連れていくとかそういうことではなくて、知的好奇心を揺さぶる体験が大事だと思います。それと勤労の体験をとおして、感謝の気持ちを持つとか、最後までやりとおす達成感を味わわせてあげるとか、有用感を持たせるといった精神面の成長があってこそ、学力の低下っていうのは防げるのではないかと考えています。

最後は、授業力を付ける校内研修の充実についてです。先生方が子どもと最も長く過ごす時間は授業です。学校の中では、学校はその授業をとおして子どもたちを育てることが第一の責務だと思います。ですから、柱1でもお話ししましたが、本年度本校では社会科と算数の授業に取り組んでいるんです。要請訪問で2回の理論研修、10月と12月に授業研究を行います。本校は20代・30代・40代の先生が一人ずつで、あとは全部50代のベテランなんです。いずれの授業も若い先生方が授業者なんですけれども、やはりこういう研修をとおして、若手であってもベテランであってもさらなる授業力の向上を目指してほしいなと思います。あと、安房東中学校区の三校の取組についてです。今年からフリー授業参観ということを始めました。各学校が一週間の期間を決めて年間2回ずつですけど、自由に授業を参観し合ってますね。これもお互いに良い刺激を与えたり、受けたりしながら、授業改善に取り入れることができる大変有意義なものだなというように思います。

**吉田**：学力向上に向けて5点のお話があったと思います。具体的にお話していただきました。また後ほど具体的に質問させていただきたいなと思います。

**相良**：先生方も努力されてきているから良くなってきているんですけど、授業が数年前より格段に違う感じがします。とにかく、45分間の授業を子どもたちがやっている時にすごくいいんです



ね。理想を言えばきりがありませんが、私の学校は僕が今まで見てきた中ではちょっと理想に近いという状況です。他の学校に見に行くよりも自分の学校のほうが良い、ちょっと言いすぎかもしれませんが、褒めすぎかもしれませんがね。

そこで一つ考えていることは何かというと、その授業がどう余韻を残して授業を進めていくのかということだと思います。いわゆる余韻のある授業というのは何かというと、授業が終わった後に、子どもたちが「もっとこういうことを調べたい！もっとこういうものがやりたい！」と思えるかどうかだと思います。いろいろと家庭環境やその他のものがあると思うんだけど、やはり家庭と学校との融合性が、今図れていないかなと感じます。ですから極端な話、土日をはさむと館小の場合、月曜日に休みが多かったりするんです。せっかく金曜日まで積み上げてきたことが土日になって崩れてきて、もう1回月曜日から始めなければならないことがあるんです。もちろん家庭のがんばりを期待したいのですが、現状ではがんばって協力してもらえぬ家庭と、生活することに精一杯の家庭があって、とても子どもの学習に目を向ける余裕がない家庭もあるわけです。何が大事かということ、それを家庭のせいにしても仕方がないので、何とか学校で余韻のあるような授業をしていって、少しでも土日に勉強に目を向けさせるということをしていかななくてはならないと感じます。そのために宿題を与えたりすることはあるんだけど、実際は宿題を多く与えていないと勉強もしないという問題もあります。それを家に帰って勉強が楽しいという思いが持てるようにすることが大事だと思うし、我々の務めだと思います。とにかく教員は研修をしていながら授業力を上げていくというのが、特に安房の地域では大事なかなと思います。

もう一つは、石井校長先生もおっしゃっているように小中の連携も大事です。何が大事かということ、結局、中学校畑にいた時には、小学校でどんなことをやってきたのかをまったくわからなかったわけです。入ってきた中学生をいきなりつかまえて、「おまえ、小学校とは違うんだよ。ここは」と、いつも同じように始めていました。それは僕も失敗だったかなと思います。というのは、学習には連続性があるから急に小学校6年から中学校1年に人格が変わるわけではないし、能力が飛躍的に発達するわけではないから、丁寧に見ていか

なければならぬ。ただ、今何ができるのかというと子どもの交流はなかなか難しいので、ぜひ先生方の交流をやってもらいたいと思います。そこに必ず学力を向上させるヒントがある。ですから特に安房という狭い地域なので、もっともっと先生方が交流することが一つ子どもたちを連続的に見るという面で大事なかなと思います。以上です。

**吉田**：まずは良い授業をするのが大切だと。そして「勉強したい」というような方向に持っていくことが大切だというお話でした。また、教師の交流による小中連携が大切というお話もありました。

**早川**：高校の方は、安房地区に公立が4校、それから私立が2校。かなり学校間に格差がある。進学中心の学校もあれば実業高校もありますし、定時制もあるというような形で、案外と輪切りにされて他の地域に比べると固まった生徒が入ってくるわけです。高校の場合は、そういった学校ごとに格差が生じてしまうので、中学校、小学校では大体同じようにできる生徒が各高校で当てはまるのかということ、そうではないと感じます。

学力の面で見えますと、どちらかというと実業系の学校で長く進路指導をやっていたので、小中で、特に中学校ではどちらかということ成績が芳しくなかったような生徒と接してきました。できる子たちは、高校に行って大学とか専門学校とかに進んでいくのでしょうけれども、ある面学力的に低い子たちの進路が課題です。

子どもたちをどう導いていくのか。私は、子どもたちが、将来、一人で独立してたくましく生活していく能力、これを身に付けさせるのが生徒の本当の学力じゃないのかなと思います。進路で就職を担当していた時に成績の良い、おとなしい子から就職が決まっていくわけではありません。どちらかということ鼻っ柱の強い元気の良い子が内定を先にもらって、おとなしめの子の就職がなかなか決まらないという例が多々あります。これは何だろうかと考えてみますと、たくましさといったものではないかなと思います。たくましさを身に付けていくために勉強もあるのだろうし、運動もあるだろうし、部活等での人間関係もあるだろうというように感じました。そういったものを総合的に育てていく必要があるのでしょうか、高校の場合はどうしても高校全体で取り組んでいるのもあるんです。生徒数も多いですし、職員の数も多いですから職員によって温度差が、若干生じてしまいます。ですから、その取組がなかなか共

通して一斉にいかないところもあります。そこをまず職員間、研修とかで深めていくことが大事です。それともう一つは、研修をしっかりと進めて、授業の内容を向上させていく必要があるという感じですか。

ただ、生徒一人ひとりの原点を考えていくと、どの学校の先生方と話しても、あるいは進路指導の先生方と話しても、基本的な読み・書き・そろばんだと感じます。高校では英語も入ってきますけど、進路指導、就職なんかの場合では英語は入ってきません。進学の場合、英語は入ってきますけど、とにかく読み・書き・そろばんだと思います。基本的なことができなくて、それができないがためにその上にいくら同じことを言っても砂上の楼閣のように崩れていってしまうと言われていています。高校になってから、漢字や算数を一からでは、高校の教科書の内容ができなくなってしまう。そのことが悩みの種です。多分、進学校の先生方もそういったことで悩んでいらっしゃるだろうと思います。勉強するのが好きではない生徒さんたちの能力というものもありますが、その点の基礎的な力、どちらも小中でやってきていることを高校で一からでは、手遅れになってしまうという心配も否定できないかなと感じます。もしそういうこととは違うということであるならば、御意見をいただきたいと思いますが、そのようなことを正直感じています。

**吉田**：高校での進路指導の経験から、知的側面での学力の大切さということと、一人で独立してたくましく、ということを強調されていました。

**永田**：先ほど石井先生、相良先生の方から勉強に対する動機づけとか、意欲をかきたてられるような授業をやっていくことが大切だと意見がありました。私もそう思います。本当は一番理想的ですけども、もしかしたらいやいややっている勉強の中で勉強することが楽しいと感じることがあるかもしれないなと思っています。私が生徒に接していて、とにかく勉強時間が全然足りない。まず学力向上ということにおいて家庭での勉強時間を増やしたいなと考えています。これは私だけではなく、塾の思いでもあります。私たちが具体的に努力していること、結果としてまだまだ不十分なところもありますけど4つお話をしていきたいと思います。

まず授業と宿題の点、それから叱るということについて、補習についてお話したいと思います。

授業については、家庭で勉強がしやすいように、まず授業中に極力身に付けさせて帰すということをやっています。そのために暗記をする時間を確保しています。例えば安房高校の生徒ですら「公式を今から覚えろ！30秒で覚えろ！」と言って、小学生に対してやっているようなこともやっています。難しい公式をその場で覚えさせて、その場で身に付けさせて帰しています。

それから、生徒に実際に問題を解かせる時間の確保ですね。難しい問題を説明して、「はいじゃあ、あとやっておいて！」では、なかなか身に付きません。やはり聞くのと実際に自分がやるのでは違いがありますから、生徒に問題を解かせる時間をきちんと確保させるということですね。

それから3つ目ですが、授業の頭に、小テストを必ず毎回実施しています。これは、理解度を確保させるためのテストではなく、家庭での学習習慣を身に付けさせるためにやっています。つまり小テストがあるから家で勉強してこざるを得ないという状況を作り出していくことなのです。しかも簡単な問題を出して100点を取らせて褒めるというスタンスではなく、わざと難しい問題を出して本当に家で勉強してこない点数が取れないというような小テストを構成しています。不合格者は当然残します。授業が終わった後に、「あなたは不合格だったから残りなさい」と言っています。今、土曜スクールという南房総市の富浦中・和田中・千倉中と協力してやらせていただいています。はじめ10月にスタートした富浦中では、小テストの結果が20点、30点はざらでした。今でしたらほとんどの生徒が90点だとか100点を取ります。職員の目から見ても、それは明らかに家で勉強してきているんだなという感じで非常に効果が出ているなと思います。

それから4つ目ですけど、これは皆さんがおっしゃっているのですが、良いところがあった時には、きちんと生徒を褒めることということです。今年、私が見ていた生徒で、塾に入ってくる時に学校の成績がどのくらいの順位なのかを事前に個人情報を手に入れるのです。そうしますと、下から数えた方が明らかに早い生徒さんがいまして、その生徒さんに一番最初の授業で、こうやって言いました。「先生は怒ると怖いよ。厳しいよ。だから次の小テスト一生懸命勉強してきて合格点を必ず取れるように勉強しなさいよ」と話したら、その生徒が、「分かりました」と言ったのです。次の

週、けっこう厳しく言ったので、合格の最低のライン 70 点ぐらい取れるかなと思っていましたが、その生徒だけが 100 点取ってきました。私、本当に感動しました。しかもきちんと勉強してこなければ、絶対 100 点取れるようなテストではないのですね。私は生徒の前で本当に褒めました。「本当にがんばったね。一生懸命がんばったでしょう？」と聞きましたら、「はい。先生、私ががんばりました。学校で 1 P ノートをやっているんですけど、この 1 週間、先生の小テストで 100 点取るだけのためにやってきました」と言ってくれました。私それを聞いた時に、本当に涙が出そうでしたけど、「本当にありがとうね。これからがんばっていきましょう」と言って生徒のみんなの前で褒めました。その日、保護者に「お母さん、学年の成績がすごく悪くて、うちの塾についていけるかどうかすごく心配でしたとおっしゃっていましたが、すごくがんばっていますよ。お母さんからよくがんばったねという形で褒めてあげてください」と電話をさせてもらいました。

あと宿題の工夫について先ほども言いましたけど、基本的には多く出すというスタンスでいます。中にはずるがしこい子がいて、授業前にちょこちょこことやって、「はいできました」ということが起きますので、きちんと家庭である程度、時間をかけないとやれないように宿題の量を多く出して、原則として自分で丸付けまでさせるという自己完結型の宿題にして、最終的には塾の力を受けられなくても自分でやっていける力を付けるということが一番大事だと思います。ですから自分で丸付けをさせるという宿題の出し方をします。

それから次、叱るということですが、私はすごく大事なことだと思っていて、とにかく真剣に叱るということですね。授業中にしゃべる生徒が出てきましたら、その場ですぐに、「うるさい！」と言って厳しく注意します。宿題を忘れてきたことに対しても厳しく注意します。それから小テストの結果が悪いという点についても「きちんと家で勉強してくれば、点数取れると思うのに、何で宿題をやっけないの？」ということで叱るようにしています。生徒もこちら側が真剣に叱りますから私の方がいけなかったなと反省してくれます。私の中ではすべての生徒に本当は好かれればいいんですけど、嫌われても大いに結構だと、子どもたちのためにここで叱らなければならない、嫌われても結構だという時には、どなりちらすように

怒る時もあります。ちなみにうちの塾では、実は叱る研修をやっています、叱り方が下手くそな先生は学院長から何度も指導を受けるという形で叱るという研修をやっています。どうやって生徒の心に響く叱り方ができるかということ学院長から指導を受けます。

最後に補習です。だんだん前向きに勉強してくるような生徒が出てきて「先生、ここが分からない」とか、そういうようなことが出てくる生徒さんには、極力勉強に付き合うように努力をしています。また、テスト直前になって「今さら聞くな！直前になって何を言っているのだろう？」と思う生徒もいるんですけども、そういう前向きな生徒に対してはなるべく時間をやりくりして付き合っています。でも、私も普段授業が入っていますので、授業が終わった後、10 時からとか、11 時半ぐらいまで保護者の方に御協力いただいて夜勉とか、朝勉を行っています。現在、朝勉は朝 6 時半から 8 時半ぐらいまで補習をやっています。私はつきり言ってどのぐらいの生徒が来るのかなと思ってはいたんですけど、多い時に在校生生徒の 3 割ぐらいが来てくれていて、高校 2 年生、3 年生が夜の 10 時から 11 時半までカリカリ勉強してがんばっています。以上です。

**吉田**：先生から塾のノウハウを教えていただきました。特に小・中学校の方もそうだと思いますけど、叱って困った時に保護者に電話をするということが多くはすけれども、良かった点について報告する方が相乗効果を上げられるという考えでした。

**杉村**：私もいろいろ永田先生から教えていただき、個別の授業で参考にさせていただいています。まず先ほど石井先生がおっしゃったことや私が言ったことですが、本当に良いお子さんが多いですね。生活習慣ができていて、協調性もあります。学校の中では、30 分の 1 だったり 40 分の 1 だったりするのですが、私の場合、個別授業ですから、1 対 1 で逃げられないのです。まず自分で考える、考えさせるということに力を入れています。教えるということは学校でもある程度やっていますし、教科書を読めば分かることなので、教科書をしっかり読ませて自分でまず理解させるというようにしています。問題集とか高校生でもほとんど学校の教科書と学校で配布している問題集だけで、かなり高得点が取れるのですね。新たに参考書や問題集を買わなくても、高校生の数学でもちゃんと

点は取れます。まず自分で考えること、そして中学生とか高校生でもやっぱり書かせる、読ませる、答えさせる。とにかくやらせます。国語の要約の問題では100字以内でこの文章を要約しなさいとか、数学の図形の問題では、高校生でも本当に嫌がりませけれども、とにかく図形やグラフを一つひとつ書かせて自分で考えさせます。普通の学校の授業だと板書をノートに写してきれいなノートを作って終わりになってしまいますけど、生徒たちのノートを見るととてもきれいなのですが、問題を出すと出来なかつたりすることがあるんです。自分で問題を解かせるということ、単語とかをその場で覚えさせるとか、宿題をやってこなかったら「今すぐここでやりなさい」とやらせたり、あとは答えが分からないと言ったら「分かるまでもう少し考えなさい!」と、ちょっとヒントを与えて待ちます。それは根気比べみたいなもので、生徒さんの性格もありますけど、自分のやっていることをよく考えてみると、家の自分の子どもに教えているのとまったく同じことをやっているような形になります。ただそれは、塾に通ってきてくれるので、何とか成績が上がるように私もがんばりますけど、生徒自身が自分で勉強しようと思わないと身に付かないんです。ですから自分でやらせるということを大事にしています。生徒の成績が上がることによって、その子にはプライドというものがあると思います。一方、成績のわるい子、できない子は自分に対してプライド持てない子が多いです。まずある程度伸ばしてあげて、そこでできたところで結果を出してから褒めるのですけど、そこでプライドを持つことができる。やっていく中で、自分の成績が落ちることにショックを受けたりしますが、そこで励ましてもう一度上げるようにしてあげるといふことに私は重点を置いています。以上です。

**吉田**：結果を出させて、その子に自信をもたせて力を伸ばしていくということですね。それでは、休憩をはさんで後半の柱3に入ります。

**森田**：それでは、柱3の方に移らせていただきたいと思います。これまでの話をまとめますと、学校・先生方に期待されること、求められている学校像、こえまでの取組とメッセージということでお話いただきました。では、柱3について、石井先生からお願いします。

**石井**：ちょっと頂いた柱3がよくわかりませんが、学校に期待されていることなのか、していること

両方でちょっと外れてしまうかもしれないです。

まず、本校の学校教育目標は「地域の次代を担う活力ある小湊っ子の育成」というものです。これは残念ながら今年来た私がつくったものではなく、以前からあったものです。4月からこの学校教育目標でこの1年やっていくのに、何でこの国際社会の世の中で地域の次代かなと思ひ、どう解釈しようか悩んだのですけど、今はたいへん良く分かるようになりました。この学校教育目標は、自分がつくるとしてもやっぱりこうやってつくつただろうと、私としては気に入っています。どこがどう気に入っているかという、ふるさとを愛し、ふるさとを心とする人を育てることが地域を支えている力となって、この地域が活性化してくる。それが、国を支える力となってくる。ちょっと本校の地域から国ということは大きいかもしれませんが、でもそういうことだと思います。地域の活性化なくして日本の活性化はない。一流の志とかそういうものを持つ人を育てることが私たちの仕事ではないか。一流の志とかそういうものをもっているから全国的にも有名になったり、世界的にも有名になったりしていく。そういうものがない人が地域に残るのではなくて、地域に残って生きていっても、たまたま他地域で華々しく生きていくという生き方があるのかもしれないけど、どちらであっても一流の夢とか志をもって「確かな学力」「豊かな心」「健康な体」を身に付けた人を育てていきたいと思っています。私が死んでからずっと先のことだと思うのですけど、そういう人に未来を託していきたいと考えています。これがすごく自然なのかなと思います。裏を返せばこういうことが学校に私たちに求められているのではないかと思います。

では、もっと具体的にそのためにどうするか？先生方一人ひとりがチャレンジの心を持って自らを鍛えることが大切だと思います。「自ら向上しよう」、そういう姿を子どもたちの前に示すモデルとなるのが、最も効果的な教育なのではないかと思っています。本校の先生方にもそういう教師になるように研鑽を積んでもらいたいなと思っています。

ある学校の授業を参観させてもらう機会がありました。人数は11人とか12人しかいないんですね。本校の課題でもある自分の考えを主張できることが弱いということで、人数が少なければ少ないほど、そういうのが弱いのかなという感覚が自

分にもあったんです。その授業を一度じゃなくて数回見させていただいたんですけど、その中で子どもたちが自分の意見をたった 10 人位だけど立派に主張しているんですよ。本当に見事に主張していると思いました。授業は小学校 6 年生だったんですけど、それを参観していた中学校の先生が、「どうして小学生でこれだけ自分の意見が言えるのに、中学に行ったら言えなくなってしまうんだろう。中学校に行くときこれだけ言えませんか」と話している方がいました。本当にそうかな、いや私はそんなことはないと思っているんです。子どもたちをどういうふうにしたいのか、子どもたちにどんな力を身に付けさせたいのか、ということを真剣に考えて、そのためにどうしていくか。そしてやってみて、また振り返ってみて、それでもまだその力が身に付いていないなら、また挑戦するんです。その繰り返しではないかと思いました。「小学校でこれだけできたことが思春期に入ってからだんだん自分の考えを言うのが恥ずかしくなってしまうのよね」という見方をされる方がいらっしやいますが、そういうことではないと思います。

よく「PDCAのサイクル」と言いますよね。Plan, Do, Check, Action。私はOがないと思います。Objectすなわち目的ですよ。Oがあって「PDCA」がある。つまり「OPDCA」となるのです。これは私が発案したわけではなく、ある方がおっしゃっていたものなのですが、そのとおりだなと思ってここでも紹介させていただきます。つまり目標をしっかり定めることが大事なのです。日々の忙しさに追われてしまうことが学校の現場ではありがちなんですけど、1 学期、2 学期、3 学期あるいは前期、後期が始まる前にしっかりと目標を立てる。それから、しっかり振り返りをする。これは使えるサイクルかなと思います。今の校長という立場で振り返ってみても、このようにうまくできてないところがあります。これは自分のやり方に何か不足しているところがあるんだろうなと思っているんですが、チャレンジの心をもって、自らを鍛え、向上しようとする姿を子どもたちの前で見せていくのが支えあう職員集団として大切なんだと思います。やはり仲間がいなければできないことかなと思います。また、仲間づくりや人間関係づくりも子どものモデルとなるためにはそういうことができる職員室・職員の間関係づくりをしていかなくてはならないと思うんです。これは、私の立場

だったらどう職員を率いていったら良いのか、まだ 1 年目ですので、時間をかけて探っていきたいなと感じている毎日です。以上です。

**森田**：相良先生お願いします。

**相良**：それでは、また厳しいことを言うかもしれないですけど、自分のやれなかったことも含めて話したいと思います。冒頭から言っているように、今回は確かな学力を「見える学力」を中心に考えていきますが、実際私は「見えない学力」も大事な学力だと思います。ただ今日は「見える学力」ということで話をさせてもらいたいと思います。

子どもたちって勉強していて何が楽しいかって、最後にテストを配られてテストで書けた時が一番楽しいんじゃないかって思うんです。中学校に僕も長くいた時、やはり上手い先生はテストの点数を取らせるんですよ。何が上手いかというと、さっきの塾の先生もおっしゃったように、厳しくある程度しつけられながら、「このところは覚えるんだよ」、ということをやっているんですよ。とりあえずこれだけすれば点を取れるということをやらせていく。最初はそれが嫌だった子どもたちがそのスタイルを覚えていく。良い点数が取れば親にも自慢ができるし、自分でもうちょっと勉強しようと思っていくものです。ですから、やはり授業が上手い先生は大事だと思います。あるいは、点数を取らせる先生。そう考えると、小学校の先生って良い授業をしようと思うのだけでも、点数を取らせようと思っているのかなというところがあります。もちろん館山小の先生は、授業研究を頑張っているんですけど、その点あまり見えてこないところがあるんです。点数は取れた方がいいなと思います。疑問に思う点が、中学校で今入試に向けて実力テストをやっていますよね。原田先生、500 点満点で平均はどれ位ですか？

**原田**：平均は 220～230 位です。

**相良**：そうですね。本来 500 点満点取らなければいけないところで、平均 220, 230 点ということは半分もとれないということでしょう。3 年間我々が教えてきて、実力テストをやらせると半分もとれていないことを不思議に思わないのかなと思います。僕は現場にいる時は不思議に思いませんでした。実際に生徒は勉強していないから、というように……。それを思うと今の評価システムというのは、テストの点数で考えると子どもの実態とかけはなれていると教員は感じなければいけないと僕は思うんです。冷静に考えると 500 点

満点で220, 230点しかとれない。これ、どう考えてもおかしいでしょう。それではテストを難しくしないようにさせるのか、子どもたちの学力を上げていくのかと、そこを根本から考えていかなければならないと思います。ということはということかと言うと、小学校の先生も身に付けさせなければならない学力というものを小学校、中学校で連携してやっていくことがすごく大事なことだと思います。そのためには何が大事かと言うと、個別でやっているとは対応できないかな、という気がします。自分も教育委員会にいた時は何もできなかったんですが、例えば安房地域全体を教育推進地域とかに決めてしまい、一週間に一回は「ノーテレビデー」とか「ノーゲームデー」とかして、みんなでやっぺいこうとかね。こういうことをやっていくことが大事かと思うんです。そうすると毎週水曜日は小学校の先生も中学校の先生もみんなが同じことを一斉に言えるじゃないですか。「今日はテレビ見ないで、ゲームしないで勉強するんだぞ！」。その代わりに「今日は普段よりも宿題を多く出すからな」とか、みんなでやっぺいけば、そういう気持ちになっていく気がするんですね。なぜそう思ったかと言うと、南房総市が塾の先生を入れて、勉強を教えるということをやっていますが、安房地域全体でもやっぺいもいいのかなと思います。例えばもう一つは、こういう地域で元気な年寄りがいっぱいいるんだから。そういう方は学校で地域支援ボランティアとか学校支援ボランティアとかやっぺいしていると思うんです。もっとそれを広い形で、みんなで取り組んでいくようにすると良いと思います。大げさですけど、「安房に引越してきたら子どもは勉強しなきゃいけないんだよ」と、それくらいの地域になればなと思う。そういう地域をつくっぺいこうと言える団体が研究所じゃないのかなと思います。ですから研究所の先生方、そういう意味でも、もっと安房地域全体を視野に入れて変えていこうという思いでやっぺいければいいと思います。僕も研究所に5年間いて何もできなかったですけど、研究所にはそういうことも期待して、陰ながら応援していきたいなと思います。

**森田**：早川先生お願いします。

**早川**：柱3の学校と保護者、地域社会に期待することということで分からないこともありまして、自分なりの私見を述べさせていただきます。

私は、高校の教員という立場で見たときに、高校には学校間格差があると思います。ですから、学校によって一律の指導ができないことがあります。でも、その中で一番大切なのは「キャリア教育」なのかなと思います。これは「出口指導」ではなくて、その人の人生設計、生徒の将来設計だと思っています。先生方自身もその一員として学校の中での役割、それから地域では地域の人間としての役割、ただ私なんか子どもが中学校でお世話になっているんですけども、保護者とかPTAの役割、こういったものをすべて一括して生徒に向かっていく。その中心が小学校の先生だったり、中学校の先生だったり、高校の教員であったり、塾の先生だったりという形でいろいろな役割を担った中で、それぞれ生徒に向き合っていく。生徒と向き合う人たちの向き合い方によって生徒が変わってくるのではないかと思います。一律このように、という問題ではなくて、そういった先生方一人ひとりの生き方を生徒に伝えていく。私はこういうことが大事だと思います。

その中には、先ほど小中連携という話がありましたけど、高校の場合にはどうしても入試というものがあります。その点でなかなか連携しづらな部分があるんですけども、安房郡市には学校数が少ないですから、小中と地域の高校との連携も入れて参加させていただければ、安房は勉強ができる地域になるのではないかと感じます。

**森田**：永田先生お願いします。

**永田**：働いている環境はそれぞれ違うかもしれませんが、子どもの幸せを考えていこうという点について言えば同じだと思いますので、できれば今後、授業の計画にしてもお互いに研修するとか研鑽会を開くとかして、塾と学校が交流を持っぺいければいいなと思います。私たちの努力や行動によって子どもたちはどうにでもなる。大きく成長もするでしょうし、変わることもあるでしょうから、本当にお互いに頑張っぺいきたいなというように思います。

先ほど、相良先生から「ノーテレビデー」等の話がありましたけど、私は本当に面白いと思います。私は高校生を見ていると、一番気になるのが携帯電話なんです。この携帯のメールが入りますと、すぐに勉強を中断して、メールチェックをして返事をして・・・、ということをやっぺいまして勉強に全然集中できていないんです。この携帯電話を週1回、1日取り上げられたらどれだけい

いかなと思うこともありますので、そういったことを安房地域が発信してやっていくと、非常に面白いですし、「本当に携帯って必要なのか？」ということを保護者の方にも考えていただく良い機会になると思いますので、こういった面白い試みも積極的にやっていくと良いと思います。そういう試みで塾も協力していきたいと思います。

**森田**：続きまして、杉村先生お願いします。

**杉村**：子どもたちは、幼稚園や保育園に入った時から大人の顔をずっと見上げてくるんですね。子どもたちが小さい時のことを思い出していただくと、下から一生懸命見上げている姿が思い浮かぶと思います。子どもたちは保育園や幼稚園の時からずっと先生たちのことを見ています。どの先生が優しいとか、どの先生が厳しいとか、どの先生が厳しいけど話を聞いてくれるとか、そういうことは子どもたちが本当に小さい時から学んでくるんですね。それは、子どもたちができるだけ嫌な思いをしないで、苦労しないで生きていくために身に付けていくもので、ある意味ずるがしこいかもしれないですけど、子どもたちは一生懸命大人を見ています。先生だけではなくて、親も見えていますし、周りの大人もそういうように見えています。周り人たちを見ながら育つんですけど、そういうところから子どもたちは学校の先生を信じて、ずっと育ってきています。保護者もいろいろ言いますが、やはり保護者もそういう子どもたちを見て、一緒に先生方を信じてずっときています。先生方には、本当に意識を持っていただきたいと思っています。それと、子どもたちが卒業してからも、その先生たちとの思い出というのはずっと持ち続けていまして、いろんな会話の中でも、「あの時、あの先生はこんなこと言ったね」とか、そういうことはずっと残ります。子どもたちは、本当に自分のことを思ってくれる先生かどうかということを見ています。厳しい先生でも、厳しさの中に正義とか愛情とかそういうものはちゃんと感じ取ることができます。たとえ小学校や中学校で反抗したとしても、それが本当に先生の言っていることが正しければ大人になってからそれが尊敬に変わってくるんですね。「あの時の先生はああいうことを言っていたけど・・・」って尊敬に変わります。ただ逆に、手をあげれば子どもたちが成長した時に、軽蔑に変わってしまうと思います。ですから本当に真剣に子どもたちの教育に当たっていただきたいと思っています。そうすれば、学力問わず立派な大

人になってくれると思います。保護者の立場からもよろしくお願い致します。

**森田**：ありがとうございました。これまで5人の先生方から貴重な御意見をいただきてきました。それでは、その他、パネリストの皆さんから御意見がありましたらお願いします。

早川先生お願いします。

**早川**：教員というものは、僕も含めてそうなんですけど、とかく学校という社会の中で学校関係者、それから生徒との関係の中だけという感じがします。私はこれまでの進路指導で、就職を主に担当してきたのですが、そこでいろいろな企業の方、大学や短大等の学校の団体、こういった方とお会いする機会が非常に多かったです。その中で感じたことは、先ほども述べましたように就職する時に欲しい生徒は我々の尺度と違うんです。先生方の狭い環境下ではなく、ぜひとも世の中について、常に意識し、アンテナを張っておいてほしいと思っています。特に、高校の場合では、社会という出口があるんですけど、小中の場合では、その先が小学校の場合は中学校、中学校の場合は高校ということで、学校から学校という中できています。そうすると、社会の様々な取組、それから地域社会を含めた一般的な社会への積極的な参加という意識を身に付けることが大切になってくると思います。私は長く進路指導をしまして、つくづくそう感じました。

**森田**：ありがとうございました。それでは、5名のパネリストの先生方、本当に長い時間にわたりまして御意見をいただきありがとうございます。パネリストの先生方それぞれの立場での考えをうかがい、考えさせられるものがあったと思います。もっとお話しをいただきたいところですけど、今度は、フロアの先生方、また参加されている方々から御意見をうかがいたいと思います。パネリストの皆様からお話を頂戴して、もう少し詳しくうかがってみたいとか、また感想とかでもよろしいと思います。いかがでしょうか。

**川名**：情報部の川名と申します。今日は様々な意見等を聞かせていただき、学力向上に付いて深く考える機会となりました。ありがとうございました。私を感じたことを2点お話したいと思います。

まず、教員が生き方の一つのモデルとしてという早川先生の御意見に大変共感しました。自分自身も地域の中でたとえば消防団に入ったりとか地域の祭を運営するために青年会に入ったり、先輩

と付き合ったりとかということの中で、学校の社会だけではつくりきれない地域の中での関係とかがあるように、子どもたちも学校の中で見せる顔と地域の中で見せる顔と色々あります。私たち自身も広く地域に出て行って、あるいは家庭の中で、自分自身が家庭の中で十分できていないところもあるんですが、生き方を伝える、自分自身はこういう人間だと伝えていくことが大事なんじゃないかなということ、子どもを育てながら考えるようになってきました。

もう一点ですが、私の学校が1クラスの人数が大変少ない小規模校なんですが、学校の中で今、叫ばれていることは手をかけすぎないということです。子どもが答えを考えている時に先回りして答えを出したりせず、子どもが思考錯誤始めているのに先に導いてしまうところをちょっと待って見守ってあげる、考えさせてあげる、自分でもう少し進めさせてあげるという部分がとても重要だと言われています。

安房地域の中で小規模校というのは決して少なくはないです。そして、これからもまだまだ存続することになると思うので、子どもたちに対してどういった形で答えを導き出させるかという点で、普段の授業や指導というものを学校の方でも重視していきたいと考えます。その意味でも大変共感するお話でした。どうもありがとうございました。

**森田**：ありがとうございました。続きまして他にいかがですか。

**渡邊**：今日は5人の先生方、大変お忙しい中、本当にありがとうございました。いろいろと勉強になることがたくさんありました。ひとつ興味を持ったところとか、もう少し聞いてみたいということがあります。永田先生が柱2の時にお話をしたことで、児童をほめる、宿題を叱る、予習と5点あげられたと思います。その中で叱るということについて、「叱る研修」をするという話が印象に残ったんです。私も自分が教員になって、ほめること、叱ること、特に今ほめることが良く言われている気がするんです。でも実は叱ることは、ほめることより案外難しいことなんじゃないかなと感じています。その子どもが家に帰って、叱って帰った時、気になって電話をしたこともありますし、帰るまでにはもう少しほめていい気持ちにして帰そうとか、自分でもほめることと叱ることの両輪がとっても大事だと思うんです。もし神子学院さんの方で行っている叱る研修ということをも

う少し詳しくお聞かせ願えたらと思うのですが、いかがでしょうか。

**森田**：永田先生よりしくお願いいたします。

**永田**：うちの代表が元教員なんですね。小学校と高校でやっているんですけど、生徒のしつけがうまくて、叱り方が上手なんです。その代表がこういうシチュエーションだよということで設定場面をして、「その生徒に対して叱ってごらんさい」という模擬叱りをやらせるわけです。その際に出てくるセリフだとか表情を見て、「全然怖くない、やりなおし」だとか、生徒に対して怖いなど感じられればとか、本当に真剣に叱っているというのが伝わっているかを指導しています。セリフとか言葉づかいや品位も必要ですから。実際問題としてうちの塾では、先生方の授業を定期的にビデオで丸ごと録画しまして、研修担当がチェックをするんです。宿題を忘れたのにチェックしてない、叱ってないんだけど、どういうことなんだということで「叱り方が甘いよ。なんで生徒のために叱ってあげないの」と指導されます。管理者が目の前にいるので怒らないと研修が終わりませんから、でも現場で本当に叱っているかを見たいわけですから、それが本当に実践されているかを確認するため定期的にビデオを入れて抜き打ちでチェックしています。あとは、場数を踏まないとうまく叱るということができませんので、代表が常に言っていることですが、「きつく叱りすぎてしまい、それがこじれて生徒が万が一に塾をやめてしまっても責任を問わないからそれは良い。でも、あなたがきちんと叱らなかつたことによって生徒の成績とか学力が伸びなかつたことでやめたということになれば、それはあなたを問いたですからね」と言っています。代表はむしろ「大いに失敗しろ」と、これは逆に管理者としての心得かもしれせんけども。いくら研修で練習しても実際のところ生身の生徒とぶつかってみないといけませんので、そこが難しいところなんです。このような形で研修を行っています。

**森田**：ありがとうございました。若い先生が学校現場でも増えてきていまして、今の叱り方について課題が多いと思います。どんなふうで叱ったらいいかと質問を受けることも確かにあると思いますが、大変参考になりました。いかがでしょうか。

**川名**：八束小学校の川名と申します。今日はどうもありがとうございました。私も毎日子どもと給食を食べているんですけど、その中で出てくる会



話というのがテレビかゲームの会話しかないということで大変悲しく思っています。「〇〇さんは、この間こういうことがあって楽しかったです」と会話をふってはみても、別の子どもから話をとられてしまう。自校は学年間の人数が少ないので全校で交流給食をやっているんですが、「〇年生のあの授業でこういう勉強をしていたね」と話をしてみると、その子がうれしそうに答えるんだけど、他の子はやっぱりテレビ、ゲームの会話になってしまうということがあり、コミュニケーションはとても難しいなと感じます。確かにテレビやゲームの話の方が簡単だし、面白いって言うていればそれでもコミュニケーションがとれたような形になってしまう、その会話だけで過ぎて行ってしまうことが多いのは仕方ないなと思うのですが、相良先生がおっしゃったように「ノーテレビデー」とか「ノーゲームデー」は、家庭の中から出していくことは難しいことなので、学校がリードしていくことが将来必要ではないかなと思いました。

もう一つは、早川先生から大人自らが子どもの将来像を示していく必要があるというお話がありました。私も本当にそう思っていて、自分もついつい疲れたと言いがちになってしまうんですが、今の自分の子どもたちが、自分の将来像ということにすごく貧困だなということを感じます。将来自分がやりたいことは何かと聞いても、「子どものままの方がいい」とか、「幼ければ幼いほどいいんだ」ということを言い張る子が何人かいたりします。そういうことがすごく悲しいなと思うので、少しずついろいろな人のためになっている職業の人のショートエピソードとかを朝の読み聞かせ等で話したりして、自分の将来像を少しずつ膨らめていってこれればいいなと考えています。本当に子どもの前で良い将来像になれるようにまた努力していきたいと思いますが、またよろしくお願ひします。ありがとうございました。

**森田**：子ども文化の変革ということで、これだけテレビゲームとか携帯電話とか普及していますと、学校側もリーダーとなって、子ども文化を変えていかないと会話も貧困になってしまい、出会いが少なくなってしまうのではと感じました。他にはいかがでしょうか。

**庄司**：館山三中の庄司です。今日はどうもありがとうございます。私は中学校で部活動の顧問をやっています。中学校の娘が苦手な教科があり、その教科を教えていただきたいと塾に行かせていま

す。私はその前に、「まず学校の先生に聞いてみたらどうだ」と言ったら、「学校も部活動の時間があるから聞く時間がないので塾に行く」というので、「友だちが行くから行くんじゃないよ」と言いました。親として失格なんです、ある教科だけ教わっているんです。自分自身も中学校にいて放課後に教えてあげたいという気持ちもあるし、来たら教えたいという気持ちも十分あります。もちろん他の顧問の先生に断ってから教わりたいという気持ちで来ているので、そういう時には教えるようにしています。でも部活の時間を削ればチームに迷惑がかかってしまうとか、いろいろ言いづらいなんていうのが子どもの中の感覚なんです。学校全体で、ある曜日だけ決めて、この日は「ノー部活デー」にして補習の時間とすれば、もっと生徒や保護者のニーズに応えられるように気がするんです。その一方いろんな保護者がいて、生徒会で1日削って、学力で1日、補習で1日続いてじゃあ週3日の練習だと今度逆に「部活動が弱くなったらどうしてくれるんだ」なんていう保護者もいるんです。だからいろんな声を聞いてしまうと難しいです。もちろん学力も大事だし、部活動で強くするもの大事。部活動で強くするためだけじゃなくて、やっぱり仲間づくりの育成とか、精神面とかいろんな部分のプラスアルファとかもあるし、生徒指導上の部分である意味生徒を抑えられるところもあるんです。だから、お互い部活動も学力もと言うところで、例えば教員が30人いたら30人が同じような方向性で、学校としてこういうふうにやっていますよということができると、もしかしたら学力も上がっていくのではと思いました。

自分が学力を向上させるため、「あなただったらどんなことができるんですか」と聞かれたら、点数を取らせてあげたいというのが大前提です。この限られた中で、まだまだ自分ができることってあるんじゃないかなということを改めて思いました。部活動をやっているからと言って勉強できませんということは絶対言ってはいけないことなので、その中でも点をあげていかなければいけないと改めて感じました。感想なんですけども、ありがとうございました。

**森田**：ありがとうございました。堀江先生お願いします。

**堀江**：白浜小の堀江です。今日はどうもありがとうございます。

1点目ですが、私は今特別支援学級を持ちながら6年生の子どもの算数の苦手な子を何人か教室に呼んで指導しています。その目的がペーパーテストで点をとらせるということでやってきました。特別支援学級の子どもの実態に応じてやっていますが、算数が苦手な子どもたちは問題集や教科書が分からなかったら持ってきなさいと言うと、丸付けをして分かりませんと言って持ってきます。「これはこうだよ」と説明すると、くり返しやっていくとなんとなく分かってテストの点もとれるようになってきたんです。「今日、みんな勉強頑張っているけど、本当はこれじゃダメなんだよ。教室でお互いに答えを出し合って、自分の考えはこうなんだとよくお互いに話し合っていかなければいけないんだよ。それがいいと思うんだよ」と言いましたら、「先生それ面倒くさいもん。先生の説明長いんだもん」という反応でした。私としてはフォローした子には、ペーパーテストでは点をとらせてあげるのがいいなと思っています。まあ、実際にそう仕上がってきているんで、他のそうでない子は表現とか言語活動の力を付けることが大切だと思っています。

2点目ですが、先程早川先生が企業の求めている力と学校が育てようとしている力が違うような話が出たんですけど、その点を企業はこういう力を求めているよということがあったら少し教えていただきたいなと思います。よろしくをお願いします。

**司会**：早川先生、よろしくをお願いします。

**早川**：進路でずっと企業とのやり取りをしていて、企業は使える人材というのを高卒段階で求めています。この使える人材というのは、指示待ちではなく自分で動ける人材ということです。部活等をやって、元気な生徒を非常に欲しいと言っています。社会において大切なのはコミュニケーション力です。ただ勉強ばかりができて、人とかかわりができない人、おとなしい子は特にそういうことが苦手な子が多いようですけども、そういう子については成績が良くてもだめな場合があります。ですから、我々が見ると、先生のいうことを良く聞く良い子、大人しい子は良い子に見えるけども、逆に企業側からすると戦力ではない。鼻っ柱が強くて、先輩から言われた時に、挨拶とかはきちんとできないとだめなんですけど、自分の考えは主張しつつ自分で考えて動けるといって、そういう人材が求められていました。ただし、それは

リーマンショックまででした。リーマンショックがあって求人が減ってきているんですけども、最近はその基礎学力が入っています。英数国に計算、昔は読み書きそろばん等、基本的な一般教養が入ってきているのが最近の傾向です。

**森田**：ありがとうございました。企業にとって使える人材とは、自ら動く力をもっているというお話でした。他にはいかがでしょうか。

**原田**：館山三中の原田です。今日は、貴重なお話をありがとうございます。子どもたちの学力向上と言うことで、先ほど石井先生から安房東学区の小中学校で行っている「授業規律」についてのお話がありました。学校現場で学校としての授業の規律だとか、学級担任であつたら学級担任としての授業の規律、個々の先生として取り組んでいるものがあると思うんですけども、塾のお2人の先生に質問したいのですが、自分も塾に通っていて学習規律と言うのがあったかなと思ったんです。塾の先生方の情熱的なものだとか取組はあると思うのですが、どの様に先生として生徒に求めているものがあるのか、授業規律も含めてありましたら教えていただきたいなと思います。

**森田**：それでは、杉村先生お願いいたします。

**杉村**：私は、個別が多いので、私の授業では自立を目標にしています。授業は1対1なので、その場で間違ってもいいから自分で考えて自分の言葉で答えさせます。まずそこから始めます。間違ったところから始まると言ってもいいくらいです。とにかく自分の力で答えさせ、自分から勉強できるようにさせてあげたいと、ただそれだけでやっています。塾に来ているから成績が上がるわけではありません。勉強は自分でやらなければいけないということをいつも子どもたちに伝えたいと思っています。

**森田**：ありがとうございました。永田先生お願いします。

**永田**：一応、塾には成績を上げる10カ条というのがあるんです。まず一つはですね、宿題は100パーセントの力を振り絞ってやってくるというのが一番大切なことですね。「丸付けまで宿題やってきなさいよ」と言ったのに丸付けがしてない。塾でこれは、やってないということになるんですね。「そこまでやってきなさいと言ったでしょう。これは、はっきり言ってやってこない子と一緒にだよ。きちんと言われたことを100パーセントやりなさい」と伝えます。それからいい加減なやり方です

ね。例えば答えを明らかに見て写したとか分かりますよね。途中の式が書いてないとかです。あとは、先生の話真剣に聞くとか。勉強に関係ないものは持ってこないとか。マンガとか、ゲーム機、これは学校と同じだと思いますが、そんなところですかね。色々ありますけども、学校と違うところがあるとすれば宿題に関する規定が一番最初に来ているところですかね。

**森田**：ありがとうございます。お時間も予定していたお時間になりましたので、これまでの話をまとめさせていただきます。

3本の柱について、安房地域の子どもたちの実態からそれぞれの立場でお話いただきました。共通して言えることは、のんびりしてしまう温暖な気候、交通のどん詰まった所にあること、穏やかな地域のせいか子どもたちに切実感がちょっと弱いかなということができました。

また、小規模校が増えていることで、最近課題になっています磨き合いの不足、話し合い活動の大変さ、言葉を用いて表現したり考えたりしたりする力の弱さから、基礎的・基本的な学習習慣はついていけるけれど、それをなかなか活用することができないという実態があげられました。

そして、多くの先生からあったように、意欲に欠けているということが、学力を支える土台として不十分であるという実態があげられていました。そのため、学習における意欲を高めるためには体験活動の不足が原因ではないかということで、地域の中での体験活動を充実させていくために学校が積極的にかかわりながらコーディネートしていく必要があるのではないかというお話がありました。

また、学力向上に向けて家庭学習が大変少ないのではないか、ということがありました。対策として学習習慣を身に付けさせていかなければならないのではないか。これは家庭と連携して家庭学習を定着させるということで、学校はそれについて積極的にかかわっていく必要があるのではないかということでした。

小中高の連携については、今日おいでいただきました塾の先生方と私どもも交流を持ち、子どもの幸せを考えていくという視点で連携を図っていくことが大事なのではないかということをお話をいただきました。あわせて先生方の授業力を高めることで、研修を積んでいくことが大きな課題だと思います。さらには、1つの学校だけでなく、安

房地域全体で学校間の連携を図り、また、先生方の交流を深めて学力を向上させていくことを考えていったらよいのではないかという意見が出されました。

本日は、生きる力と学力向上ということでお話を進めてきました。突き止めて考えていくと、やはり社会の中でたくましく生きていく子どもを育てていく、生きる力を育てていくことが学力向上につながるのではないかと思います。もっとたくさんの方にお話をうかがいたかったのですが、終了の時間を迎えることとなりました。司会が不慣れで申し訳ありません。以上で今日の座談会を締めさせていただきます。ありがとうございました。

**石井所長**：パネリストの皆さんに一言お礼を申し上げます。

本日は、安房の子どもたちの学力向上についてそれぞれの立場から御自身の経験を踏まえた貴重なお話をいただきました。子どもたちの学力向上に向け、学校と家庭・地域社会が連携をもち、様々な課題を克服していくためにどのように教育実践を重ねていくのか、私ども所員にとっては大変良い研修の場になったと考えております。

学力向上は私たちに課せられた使命であると思えます。今日のことをもう一度自分なりにかみしめて、また明日の歩みにつなげてまいりたいと思えます。5名のパネリストの皆様はじめ、会場にお越しいただきました皆様、本当にありがとうございました。